

唐代における皇太子号と皇帝号の追贈

千 田 豊

はじめに

『新唐書』・『旧唐書』には、皇太子が多く立伝されている。他の正史の列伝と比べてみても、その差は歴然である。一般的に、皇太子はいずれ皇帝に即位するため、皇太子として立伝されることはない。では、なぜ両『唐書』には、皇太子が多く立伝されているのか。その理由は死後の追贈にある。隋以前でも、即位する前に皇太子が薨去した場合、その者は皇太子として立伝されていたが、唐代では皇太子以外の皇子にも皇太子号を追贈しているのである。このような例はそれ以前にはみられない。そもそも皇太子とは、『白虎通義』巻三、封公侯に「国在立太子者、防篡煞、压臣子之乱也。」とあるように、篡奪や家臣の反乱を防ぐために立てられるものであった。しかし、逝去した者に皇太子号を追贈することは、この意に沿わない。ならば皇太子号の追贈は、なぜ行われるのだろうか。

皇太子号の追贈が初めて明確に見られるのは、西晋の愍懷太子遹である。^②『晋書』巻五三、愍懷太子遹伝には、

愍懷太子遹、立為皇太子。（中略）詔以広陵王礼葬之。（中略）及賈庶人死、乃誅劉振・孫慮・程璜等、冊復太子。とある。彼は当時権力を握っていた賈皇后に殺され、広陵王として葬られた。しかし、賈皇后の死後、名譽を回復され、再び皇太子に冊立されている。このような例は、唐代にもみられ、高宗の子であった章懷太子賢は、当時皇后であった則天武后に自殺を迫られた。『旧唐書』巻八六、章懷太子賢伝には以下のようにある。

章懷太子賢、字明允、高宗第六子也。（中略）立為皇太子、大赦天下、尋令監国。（中略）調露二年、崇儼為盜所殺、則天疑賢所為。俄使人發其陰謀事、詔令中書侍郎薛元超・黃門侍郎裴炎・御史大夫高智周与法官推鞠之、於東宮馬坊搜得皁甲數百領、乃廢賢為庶人、幽于別所。永淳二年、遷於巴州。文明元年、則天臨朝、

令左金吾將軍丘神勣往巴州檢校賢宅、以備外虞。神勣遂閉於別室、逼令自殺。年三十二。則天拳哀於顯福門、貶神勣為豐州刺史、追封賢為雍王。（中略）睿宗踐祚、又追贈皇太子、諡曰章懷。

章懷太子賢は、先に皇太子であつた李弘の薨去後に立太子された。しかし則天武后によつて、李賢は皇太子を廃され、自害に追い込まれた。死後は雍王として葬られたが、睿宗の即位に当たつて、名譽回復され、皇太子号を追贈されたのである。

このように西晋の愍懷太子と唐の章懷太子は、皇后によつて皇太子を廃され死去し、王として葬られている。その後、それぞれ皇后が崩御すると、名譽回復され皇太子を追贈されることになるのである。⁽³⁾

上述の例は、もともと皇太子であつた者に対して、名譽回復により皇太子号を追贈したものである。だが唐代では、生前に立太子されていない皇子に対しても、皇太子号・皇帝号を追贈する例が見られる（表5参照）。両『唐書』において皇太子の列伝が多く見られる理由は、ここにあるのである。しかも、一度も立太子されていない皇子に皇太子号・皇帝号を追贈する先例はこれまでなかったにもかかわらず、それを批判する官僚は、ほとんどいなかった。

この皇太子号の追贈について初めて取り上げたのが、趙

翼である。趙翼は唐代の太子追贈について、広く事例を挙げ、所見を述べたが、特に一度も立太子されていない皇子に対する皇太子号・皇帝号追贈については、礼に背くものであると批判している。⁽⁴⁾

さらに最近では喬鳳岐氏が、唐代皇太子の諡号から皇太子号について言及している。喬鳳岐氏は、唐代で盛んに行われた太子への諡号を詳細にまとめ、唐代の太子の諡法は、生前の業績や性格を評価するものであつたことから、宗室の教育手段として有効であつたと述べる。⁽⁵⁾ 彼の研究はあくまで諡号の意義であり、皇太子号・皇帝号がどのように、なぜ追贈されたかについては論究されていない。

本稿では特に、立太子されていない皇子に対して皇太子号・皇帝号の追贈が唐代において行われるようになったことに着目したい。このことが、唐代とそれ以前とで皇太子観の変化があつたことを示唆していると思われるからである。

まず、皇太子号・皇帝号追贈の詔勅を整理し、唐代の皇帝が追贈を行った経緯を考察する。そして皇太子号・皇帝号を追贈された皇子と、それ以外の追贈が行われた皇子とを比較することで、当時の皇太子位がどのような位置づけであつたかについて検討を試みたい。

一・高宗・玄宗による皇帝号・皇太子号の追贈

(1) 高宗による皇帝号の追贈

最初に皇帝号を追贈されたのは、高宗の第五子で、則天武后との間に長子として生まれた李弘である。『旧唐書』卷八六、孝敬皇帝弘伝には、

孝敬皇帝弘、高宗第五子也。永徽四（六五三）年、封代王。顕慶元（六五六）年、立為皇太子、大赦改元。（中略）上元二（六七五）年、太子從幸合璧宮、尋薨、年二十四。

とあり、顕慶元年に立太子され、その十九年後に二十四歳で薨去していることがわかる。李弘は皇太子のまま薨去しているため、普通は皇太子として立伝されるはずである。しかし、彼はその死後、父である高宗から皇帝号を追贈される。その根拠については、『旧唐書』卷八六、孝敬皇帝弘伝に以下のようにある。

制曰、「皇太子弘、生知誕質、惟幾毓性。（中略）庶其痊復、以禪鴻名。及賡理微和、將遜于位。（後略）」

ここで、高宗は李弘の病が癒えれば、皇帝位を彼に譲るつもりであったことを述べている。これは詔勅であり、讓位が高宗の本心だったかどうかはわからない。しかし高宗に讓位の意思があったことが、皇帝号を追贈する根拠となっ

ているのは確かであろう。李弘は一度も帝位につかずに皇帝号を追贈され、廟号も贈られている。また李弘以後も皇帝号を追贈された者はいるが、廟号まで贈られたのは彼だけである。李弘は一時的とはいえ太廟に附されており、他の皇子に対する追贈とはやや異なっている。だがこの追贈は、唐代、ひいては中国史において、皇族に対する皇太子号・皇帝号の追贈の嚆矢となったという意味で重要である。

高宗以後、次に名譽回復以外の追贈を行ったのは、玄宗である。

(2) 玄宗による皇太子号・皇帝号の追贈

玄宗は、唐代において皇太子号を最も多く追贈した皇帝で、五人の兄弟の内、四人に皇太子号もしくは皇帝号を追贈している。まず、玄宗の兄で、皇太子号を追贈された李塒から確認していきたい。

李塒は睿宗の第二子で、柳氏との間に生まれた。則天武后が帝位につく前の、垂拱三（六八七）年に恆王に封じられ、睿宗即位後には、申王となっている。その後、様々な官職を経て、開元十二年に病によって薨去している。『旧唐書』卷九五、恵莊太子塒伝には、「（開元）十二（七二四）年、病薨。冊贈恵莊太子、陪葬橋陵。」とあり、病没後に

惠莊太子を追贈されていることがわかる。『唐大詔令集』卷三二、追贈、申王贈惠莊太子制に、

可謂具瞻百寮、儀刑列辟。朕將永康兆庶、方自友于。天不憖遺、奄從薨逝、永惟仁範、哀慟纏懷。用表非常之榮、少寄天倫之戚。可追贈惠莊太子。

とあり、百官はこれまでの皇子と同様に葬るように進言したが、玄宗は万民を治める際に「友于」を重視しており、その「友于」を表すために李膺に対して「非常の榮」である皇太子号の追贈を行うことを決断したことがわかる。この「友于」については、弟である李範に対してもみられる。李範は睿宗の第四子であり、李膺薨去の二年後の開元十四（七二六）年に病によつて薨去し、同年に惠文太子を追贈されている。『唐大詔令集』卷三二、冊贈、惠文太子冊文には、

夫礼以情為体、欲增追遠之数、行以名而尊、是圖褒德之軌。故挾茲茂典、崇以上嗣、言念逝者、用申友于。今遣工部尚書撰太尉盧從愿持節冊王為惠文太子。

とあり、ここでは、李範を思い偲ぶために上嗣、つまり皇太子号を追贈したことが述べられている。そしてここでも「友于」が取り上げられている。このように、玄宗が兄弟に対して行った追贈には、全て「友于」の文字がみられるのである。では、この「友于」とはどういう意味なのか。『尚

書』君陳には、「惟孝、友于兄弟、克施有政。」とあり、兄弟の仲がよいことを意味している。後には兄弟が省略され、友于だけで使われるようになった。⁸⁾では、実際に玄宗とその兄弟との関係はどのようなものだったのか。

『新唐書』卷八一、讓皇帝憲伝には、玄宗の兄弟の関係について以下のようにある。

諸王日朝側門、既歸、即具樂縱飲、擊毬・鬪鷄、馳鷹犬為樂、如是歲月不絕、所至輒中使勞賜相踵、世謂天子友悌、古無有者。帝於敦睦蓋天然然。雖讒邪乱其間、而卒無以搖。

玄宗は兄弟に対して「友于」を重視し、それを根拠に追贈を行っているが、実際においても兄弟の仲がよかったことは有名であった。

いかなる時代でも、皇子同士による後継者争いは絶えない。唐初に太宗が玄武門の変において、兄の李建成と弟の元吉を誅殺したことは、当時の人の記憶に刻まれていたであろう。そのため、兄弟関係がよいことは、皇子にも求められるようになっていったのではないか。当時の皇帝にとって兄弟関係の良さを強調することが、政権を維持する上で重要な要素であったと考えられる。その一方で、玄宗は兄弟に対して行動に制限を加えている。『冊府元龜』卷一五八、帝王部、誠励には、

（開元十〔七二二〕年）九月、勅曰、「（中略）勲戚極
 褒厚之恩、兄弟尽友于之至。務崇敦化、克慎明德。今
 小人作孽、已抵憲章、恐不逞之徒、猶未能息。凡在宗
 属、用申懲戒、自今已後、諸王公・駙馬・外戚等家、
 除非至親以外、不得与余人交結。其卜祝占相及非類患
 人、亦不得遣出入門庭、妄說言語。所以共存至公之道、
 永協雍和之化、克固藩翰、以保厥休。貴戚懿親、宜書
 座右。」

とあり、諸王公・駙馬・外戚などは、外部の人間と自由に
 交流できないように、玄宗は詔勅を下しているのである。
 実際に玄宗の弟である李範は、好んで外部の人間と交流を
 持ったので、彼に関わった人物は降格されている。玄宗は
 兄弟の仲のよさを強調する一方で、彼らの行動に規制を加
 えていたのである。

兄弟の行動に規制を加えながらも、兄弟仲を殊更に強調
 するのは、玄宗の皇位継承問題と関係していると考えられ
 る。『旧唐書』卷九五、讓皇帝憲伝では、

睿宗踐祚、（中略）。時將建儲貳、以成器（憲）嫡長、
 而玄宗有討平韋氏之功、意久不定。成器辭曰、「儲副者、
 天下之公器、時平則先嫡長、国難則帰有功。若失其宜、
 海内失望、非社稷之福。臣今敢以死請。」

と記されている。玄宗は睿宗の第三子で、嫡長子は李憲（成

器）であり、本来嫡長子である李憲が皇太子になるべきで
 あったが、玄宗には韋後の政変を治めた功績があった。そ
 の功績とは、中宗の皇后であった韋后が中宗を殺害し、ま
 だ幼かった子の李重茂を即位させた時に、玄宗はこの動き
 を押さえ、父睿宗を即位に導いた、というものである。玄
 宗はこの功績により、兄で嫡長子の李憲から皇太子の位を
 譲られることとなった。

『旧唐書』卷九五、讓皇帝憲伝の詔勅には、

曾不懋遺、奄焉殂没、友于之痛、震慟良深。惟王、朕
 之元昆、合昇上嗣、以朕奉先朝之睿略、定宗社之陆危、
 推而不居、（讓皇帝）請予主鬯、又承慈旨、焉敢固違。
 不然者、則宸極之尊、豈帰於薄德。茂行若此、易名是
 憑、自非大号、孰副休烈。按諡法推功尚善曰「讓」、
 德性寛柔曰「讓」、敬追諡曰讓皇帝、宜令所司撰日備
 礼冊命。

とあり、この詔勅では、本来李憲が皇帝位を継ぐはずであつ
 たが、父睿宗の詔勅に逆らえず、玄宗自身が皇帝となった。
 そのため皇帝位を譲るという行いがある李憲には、皇帝号
 がふさわしいということが、述べられている。また、この
 史料においても他の兄弟と同じく、「友于」の文字がみら
 れる。

このように、嫡長子を差し置いて立太子されるといふ形

で皇帝となった玄宗は、兄弟に「非常の栄」である皇太子号を追贈することで彼らを悼んだことを示し、それによって兄弟同士、またその子ども達との間で争いが起こりえないということを示そうとしたのではないだろうか。

他にも玄宗は、兄弟以外に二人の子にも皇太子号を追贈している。玄宗の第六子であった靖恭太子琬はその内の一人である。『旧唐書』卷一〇七、靖恭太子琬伝には、

（天宝）十四（七五五）年十一月、安祿山反於范陽、

其月、制以琬為征討元帥、高仙芝為副、令仙芝徵河隴兵募屯於陝郡以禦之。数日、琬薨。琬素有雅称、風格

秀整、時士庶冀琬有所成功、忽然殂謝、遠近咸失望焉。

贈靖恭太子、葬于見子西原。

とあるように、靖恭太子は安祿山の兵を防ぎ、その数日後に薨去している。他の皇子と異なり、哀冊文や追贈に関する詔もないため、その詳細については不明であるが、彼は安祿山の攻撃を一時的にも防いでおり、その功績によって靖恭太子を追贈されたと考えるのが妥当であろう。

もう一人は、長子の靖德太子琮である。『新唐書』卷二

二三、李林甫伝には、

一日從容曰、「古者立儲君必先賢德、非有大勲力於宗稷、則莫若元子。」帝久之曰、「慶王往年獵、為豹傷面甚。」

答曰、「破面不愈於破国乎。」帝頗惑、曰、「朕徐思之。」

然太子自以謹孝聞、内外無甚言、故飛語不得入、帝無所發其猜。

とあり、李琮は玄宗の長子であったにもかかわらず、顔に傷があつたために、立太子されることはなかった。李琮の皇太子号の追贈に関しても、その詳細は不明である。これは彼が後に、玄宗ではなく、肅宗によって皇帝号を追贈されているからである。李琮については、次章で詳しく考察する。

以上のように、皇子への皇太子号・皇帝号追贈の嚆矢となつたのは高宗であつたが、それを兄弟に広げて行つたのは、玄宗であつた。玄宗は、諸皇子と外部との関係を制限する一方で、兄弟との関係のよさをアピールするために、追贈を行つたと考えられる。それによって兄弟やその子孫による皇位継承争いが起きないということを示そうとしたのである。また、自身の子に対しては、長子で本来皇太子となるはずであつた靖德太子琮と、生前の功績によって靖恭太子琬を追贈している。そして肅宗以後は、子に対する追贈の事例も、増えてくるのである。

二、肅宗・代宗・徳宗による皇太子号・皇帝号の追贈

(1) 肅宗による追贈

肅宗は子と兄に皇太子号・皇帝号の追贈を行っている。その兄とは、玄宗に靖徳太子を贈られた李琰である。彼は肅宗即位後に、皇帝号を追贈されている。『旧唐書』卷一〇七、奉天皇帝琰伝に、「肅宗元年建寅月九日、詔追冊為奉天皇帝。」とあり、宝応元年に改めて奉天皇帝を追冊されているのがわかる。

では、なぜ肅宗はすでに皇太子号が追贈されていた李琰に対して、改めて皇帝号を追贈したのだろうか。『唐大詔令集』卷二六、追諡、靖徳太子諡奉天皇帝制には、

故靖徳太子琰、慶鍾霄極、親則朕兄。(中略)朕昔踐儲宮、顧誠非次、於君父之命、所不敢違。以長少而言、豈忘其序。每思懇讓、竟莫獲從、遽順聖慈、守茲宝位。安可不申夙志、有闕推恩。宜加尊異之名、載茂哀榮之典。敬用追諡曰奉天皇帝、妃竇氏曰恭応皇后。

とあり、本来は李琰が皇帝に即位するはずであったが、父玄宗の命令に逆らえず、自分が皇帝位に即いた、と述べている。この内容は、前述した玄宗の兄の讓皇帝憲への詔勅と類似していることがわかる。李琰は長子でありながら立

太子されなかったため、死後に玄宗から皇太子号が追贈され、肅宗即位後は、もともと第一継承者であったことから皇帝号を追贈されたのである。

肅宗は他にも自分の子に対して皇太子号を追贈している。『旧唐書』卷一一六、恭懿太子侶伝には以下のようにある。

恭懿太子侶、肅宗第十二子。至徳二(七五七)載封興王。上元元(七六〇)年六月薨。侶、皇后張氏所生、上尤鍾愛。后屢危太子、欲以興王為儲貳、会薨而止。(中略)召薨時年八歳。既薨之夕、肅宗・張后俱夢侶有如平昔、拜辭流涕而去。帝方寢疾、追念過深。故特以儲闈之贈寵之。上疾累月方平。

恭懿太子侶は、肅宗の第十二子であったが、皇后の子、つまり嫡長子であった。肅宗も皇后も深く彼を愛した。しかし、この時すでに長子の李豫(後の代宗)は立太子されており、安史の乱においても、天下兵馬元帥になるなど、功績を立てていた。まだ幼かった李侶を立太子させるということも安史の乱の最中では考えられなかったであろう。都を取り戻し、落ち着いてきたことにより、現皇太子の李豫と、嫡長子侶を立太子させようとする皇后の間で不穏な空気が流れ始めていたが、侶が上元元年に八歳で突然薨去したことで、李豫はひとまず皇太子の地位に落ち着いたので

あった。肅宗と張皇后は、嫡長子昭の早すぎる死を嘆き悲しんだ。『唐大詔令集』卷三一、追贈、興王贈恭懿太子制にも、

方冀成立、豈期夭喪。瑤英始茂、遽摧落於當春、陳駟俄遷、忽沉淪於厚夜。興言痛悼、憫惜良深。宜寵賁於青宮、俾哀榮於玄窆、可贈太子。諡曰恭懿。

とあり、その悲しみがこの詔勅からうかがえる。つまり、肅宗が子の李昭に皇太子号を追贈したのは、彼が嫡長子であったことと、李昭の夭折を哀れに思ったからであるといえる。これは寵愛されていた臣下の死を哀れんで追贈した例と類似している。『旧唐書』卷一九〇、賀知章伝には、「惟旧之懷、有深追悼、宜加縉礼、式展哀榮。可贈礼部尚書。」とあるように、肅宗が皇太子の時の侍読である賀知章が死んだ際には、彼の死を哀れみ、哀榮によって礼部尚書を贈っている。哀榮の記載は、恭懿太子追贈の詔にも見られることから、臣下に対して哀榮によって礼部尚書という官位を追贈するのと、皇子に対して哀榮によって皇太子号を追贈するのが同じように行われていることがわかるのである。これ以後、嫡長子でなくとも、哀れみによって皇太子号を追贈される例が見られるようになる。

（2）代宗による追贈

前述したように、代宗は皇子らとともに安史の乱に関わっているため、これまでの皇帝とはやや異なった追贈が見られる。

代宗が最初に追贈したのは、弟の李倓であった。『旧唐書』卷一一六、承天皇帝倓伝に、

時敗卒膽破、兵仗不完、太子既北上、渡渭、一日百戰。倓自選驍騎數百衛從、每蒼黃顛沛之際、血戰在前。太子（後の肅宗）或過時不得食、倓涕泗不自勝、上尤憐之、軍士屬目歸於倓。（中略）時張良娣有寵、倓性忠嘗、

因侍上屢言良娣頗自恣、輔國連結内外、欲傾動皇嗣。

自是、日為良娣・輔國所構、云、「建寧（李倓）恨不得兵權、頗畜異志。」肅宗怒、賜倓死。既而省悟、悔之。

とある。李倓は肅宗の第三子で、代宗の弟である。彼は當時皇太子であった肅宗と行動を共にし、広平王であった代宗と安史の乱を戦ったのである。また、忠義に篤く、正直な性格であったため、肅宗が寵愛していた張皇后についても、物怖じせず肅宗に直言していたようである。先述したように、張皇后には幼い子があり、張皇后はこの嫡長子を立太子させようと画策していた。これによって、李倓は張皇后にうとまれ反逆の汚名を着せられ、死を賜わったのであった。その後、代宗が即位すると、彼は弟の李倓の無実

を哀れみ、齊王を追贈している。¹¹しかし、代宗の追贈は王爵だけに留まらなかった。『唐大詔令集』卷二六、追諡、齊王諡承天皇帝制に、

夫以參旧邦再造之勲、成天下一家之業、而存未峻其等、歿未尊其称、非所以旌徽烈、明至公也。（中略）敬用追諡曰承天皇帝、与興信公主故弟第十四女張氏冥婚。

とあることからわかるように、皇帝号を追贈されたのである。代宗即位五年後の大暦三（七六八）年のことであった。そしてこれは、弟に皇帝号を追贈した最初で最後の事例である。よって、その詔勅も讓皇帝や奉天皇帝とはやや異なる。李倓は、「旧邦再造之勲」、つまり安史の乱の功績により、皇帝号がふさわしいとされているのである。では、なぜ皇太子号ではなく、皇帝号を追贈する必要があったのだろうか。このことについては、『資治通鑑』に詳しく記されている。『資治通鑑』卷二二四、大暦三年四月条には、以下のようにある。

上与（李）泌語及齊王倓、欲厚加褒贈。泌請用岐・薛故事贈太子。上泣曰、「吾弟首建靈武之議、成中興之業。岐・薛豈有此功乎。竭誠忠孝、乃為讒人所害。曷使尚存、朕必以為太子。今当崇以帝号、成吾夙志。」乙卯、制、追諡倓曰承天皇帝、庚申、葬順陵。

代宗は李泌と昔話をしていると、冤罪によって死を賜った

弟李倓にまで話が及んだ。代宗は弟に追贈するという考えを李泌にしたところ、李泌は李倓を玄宗の岐王李範（惠文太子）・薛王李業（惠宣太子）の故事に習って皇太子号を贈ることを進言したのである。それにもかかわらず、代宗は李倓に安史の乱による功績があることから、惠文太子と惠宣太子とは異なり、皇太子号よりもさらに上位の皇帝号を追贈することを決定している。

さらに代宗は第二子の李邕に皇太子号を追贈している。『旧唐書』卷一一六、昭靖太子邕伝に、

大暦初、代皇太子為天下兵馬元帥。王好讀書、以儒行聞。大暦九（七七四）年薨、廢朝三日、由是罷元帥之職。上惜其才早夭、冊贈昭靖太子、葬於万年県界。

とあり、昭靖太子は、大暦の初めに皇太子の代わりに天下兵馬元帥となり、大暦九年に薨去している。これだけでは、皇太子号を追贈された理由が分からないが、『唐大詔令集』卷三二、哀冊文、昭靖太子哀冊文には、「録旧勲於藩邸、議新諡於太常、睠承家於匕鬯、追嗣位於元良。」とあり、彼に何かしらの功績があったことがわかる。詳細は不明なので、これ以上の考察はできないが、おそらく安史の乱後の混乱において、功績があったと推測される。

肅宗・代宗の時代は、安史の乱などの影響で、皇子が武勲を挙げることが多かった。薨去後に功績が認められ、皇

太子号を追贈されるのは、功績ある臣下が死去した際に、官爵が贈られるのと同様であるといえる。

（3）徳宗による追贈

徳宗以後、皇帝号を追贈された皇子は見られない。一方で皇太子号の追贈は、徳宗・文宗・宣宗・昭宗でみられる。しかしながら文宗以後の皇子に関する史料は非常に少なく、なぜ追贈されたのかまでわかる皇子は少ない。『新唐書』卷八二、十一宗諸子伝の憲宗二十子に「凡八王、史失其薨年。」とあることからわかるように、官歴どころか薨去した年代すらわからない皇子も多いのである。よって、まだ史料が比較的残っている徳宗の子、文敬太子諱については取り上げたい。『旧唐書』卷一五〇、文敬太子諱伝には、以下のようにある。

文敬太子諱、順宗之子。徳宗愛之、命為子。（中略）（貞元）十五（七九九）年十月薨。時年十八、廢朝三日、贈文敬太子、所司備礼冊命。

文敬太子は、他の王朝の皇帝家と比べても特殊な経歴を持つ。彼はもとも順宗の子であった。順宗の父である徳宗に愛され、徳宗は彼を養子として迎えている。つまり、徳宗からすれば、孫を自分の子としたのである。これは非常にめずらしい事例といえる。さらに、このような先例のな

い行動をとったにもかかわらず、その詳細は現在ほとんどわからない。また他の皇子と異なり、『唐大詔令集』にも、哀冊や追贈に関する詔勅は残っていない。文敬太子の追贈の理由について、彼の列伝から推測してみると、彼は祖父である徳宗から養子とされるほど寵愛されていたことと、十八歳という若さで薨去したことの二点にあると考えられるのである。

これは肅宗の恭懿太子の場合と類似している。早逝や寵愛による追贈は、皇太子号だけでなく、王爵の追贈にもみられる¹²。王爵の追贈は、皇子が王に封じられる前に若くして薨去した場合に行われることが多い。夭折による皇太子号の追贈は、この王爵の追贈に類似しており、皇帝がその皇子に対して特に哀れんだ時には、王爵ではなく皇太子号を追贈していたと考えるのが妥当である。

以上のように、肅宗は讓皇帝の時と同じように、自分の兄に皇帝号を追贈し、また嫡長子で夭折した自分の子に対しても哀栄によつて皇太子号を追贈した。次の代宗は、弟の李倓に皇帝号を追贈し、子の李邕に対しては皇太子号を追贈している。代宗による追贈はどちらも安史の乱などの功績によるもので、皇太子号・皇帝号の追贈の新たな根拠となった。最後に徳宗は、肅宗の恭懿太子と同様に寵愛や哀れみによつて皇太子号を追贈されているが、彼は恭懿太

子とは異なり、嫡長子はおるか、養子であった。玄宗の友子による追贈、肅宗の兄に対する追贈と嫡長子への哀れみ、代宗の功績による追贈、徳宗の養子への哀れみと、次第に皇太子号・皇帝号の追贈の根拠が拡大し、兄弟や従兄弟、甥など皇帝の近親であれば、臣下への贈官・贈爵のように、容易に皇太子号・皇帝号を追贈できるようになっていく様子がみてとれるのである。これは、皇太子号・皇帝号が官爵と同じように認識されていたと考えられるのではない。唐代では臣下への追贈が頻繁に行われ、これまでの王朝と比べても対象や範囲が拡大していたといわれている。哀榮や生前の功績による皇太子号・皇帝号の追贈を、批判なく可能にしたのは、当時の官僚たちの間で、皇太子位を官爵の一部として認識していたからと考えても、失当ではないといえるのではないか。

では臣下ではなく、皇太子号・皇帝号が与えられる可能性のある皇族たちは、薨去後に官や爵を贈られることがあったのだろうか。次節で考察していきたい。

三、皇太子号・皇帝号以外の追贈

(1) 正第一品の官爵の追贈

これまで、皇太子号・皇帝号を追贈された皇子を取り上

げて、『唐大詔令集』を中心にその理由について検討してきたが、ここでは皇太子号・皇帝号以外の追贈が行われた皇子についてみていきたい。

高祖には二十二人の子がおり、その内十五人が官爵を追贈されている。表1から表5は、『旧唐書』『新唐書』に記されたそれぞれの皇子の追贈をまとめたものである。

表1をみると、そのほとんどが、司徒などのいわゆる三公と、揚州・益州などの大都督を追贈されていることがわかる。皇子には、王爵が与えられるのが通例である。王爵は正第一品であるが、司徒・司空・太尉の三公も王爵と同じく正第一品で、爵位と官位の地位を等しくしていることがわかる。

表2からわかるように、太宗の子も、高祖の時とそれほど大きくは変わらず、三公の正第一品を追贈されている。太宗の皇子は、謀反や後継者争いにより官爵を剥奪され、太宗崩御後に高宗によって追贈されている例が多いのが特徴である。呉王恪は謀反を起こし、誅殺され、後に追贈され、呉王恪の母弟であった蜀王愔もその謀反に巻き込まれ一時庶人とされ、後に追贈されている。さらに、蔣王暉も謀反を疑われ自殺し、追贈されている。また、濮恭王泰は後継者争いによって、一時官爵をおとされている。彼等は全て太宗崩御後に、追贈されている。

33 唐代における皇太子号と皇帝号の追贈（千田）

表 1 高祖十五子への追贈

追贈された人物	追贈者	追贈された官爵	追贈者との関係	追贈された年
衛王玄霸	高祖	衛王・秦州総管・司空	子	武徳元（618）年
巢王元吉	太宗	巢王	弟	貞観十六（642）年
楚王智雲	高祖	楚王	子	武徳元（618）年
		涼州総管・司徒		武徳三（620）年
周王元方	太宗	左光禄大夫	弟	貞観三（629）年
徐王元礼	高宗	太尉・冀州大都督	叔父	咸亨三（672）年
彭王元則	高宗	司徒・荊州都督	叔父	永徽二（651）年
鄭王元懿	高宗	司徒・荊州大都督	叔父	咸亨四（673）年
虢王鳳	高宗	司徒・揚州大都督	叔父	上元元（674）年
道王元慶	高宗	司徒・益州都督	叔父	麟徳元（664）年
鄧王元裕	高宗	司徒・益州大都督	叔父	麟徳二（665）年
舒王元名	高宗	司徒	叔父	神龍初
江王元祥	高宗	司徒・并州大都督	叔父	永隆元（680）年
密王元曉	高宗	司徒・揚州都督	叔父	上元三（676）年
滕王元嬰	睿宗	司徒・冀州都督	大叔父	文明元（684）年
荊王元景	不明	追封	不明	不明

※皇太子号・皇帝号を追贈された者は除く。

表 2 太宗七子への追贈

追贈された人物	追贈者	追贈された官爵	追贈者との関係	追贈された年
恆山王承乾	太宗	王	子	貞観十九（645）年
楚王寬	太宗	王	子	貞観初
呉王恪	高宗	王	兄	顕慶五（660）年
	中宗	司空	叔父	神龍初
濮恭王泰	高宗	太尉・雍州牧	兄	永徽三（652）年
蜀王愔	高宗	益州大都督	兄	咸亨初
蒋王暉	高宗	司空・荊州大都督	兄	上元元（674）年
趙王福	高宗	司空・并州都督	弟	咸亨元（670）年

※皇太子号・皇帝号を追贈された者は除く。

高宗の子は武後の影響により、原王孝を除く三人が中宗復位後の神龍年間に追贈されている。李孝は、早くに薨去したため、薨去した際に益州大都督を追贈され、中宗復位後の神龍初めに再び原王と司徒を贈られている。許王素節は、生前許王であったことから、許州刺史を追贈されたのであろう。許州刺史以外にも開府儀同三司も追贈されていることが、表3からわかる。

次に睿宗の子であるが、睿宗の六子は末の子である隋王隆悌以外、全て玄宗から皇太子号・皇帝号が追贈されている。隆悌は、早逝したことから睿宗即位後に、隋王と荊州大都督を追贈されている。

では玄宗の子についてはどうだろうか。玄宗には三十人の子がおり、その内皇太子号・皇帝号以外を追贈されたのは、八人である（表4参照）。その大半が代宗によって追贈されており、肅宗による追贈はない。これは太上皇

表3 高宗四子への追贈

追贈された人物	追贈者	追贈された官爵	追贈者との関係	追贈された年
燕王忠	中宗	追封、太尉、揚州大都督	兄	神龍初
原王孝	高宗	益州大都督	子	麟徳元（664）年
	中宗	原王・司徒・益州大都督	兄	神龍初
澤王上金	中宗	復官爵	兄	神龍初
許王素節	中宗	復爵、開府儀同三司・許州刺史	兄	中宗即位

※皇太子号・皇帝号を追贈された者は除く。

表4 玄宗八子への追贈

追贈された人物	追贈者	追贈された官爵	追贈者との関係	追贈された年
棣王琰	代宗	復王	叔父	不明
鄂王瑶	代宗	復王	叔父	宝応元（762）年
光王琚	代宗	復王	叔父	宝応元（762）年
夏悼王一	玄宗	追封	子	開元五（717）年
儀王璿	代宗	太傅	叔父	永泰元（765）年
懷哀王敏	玄宗	追封	子	開元八（720）年
寿王瑁	代宗	太傅	叔父	大暦十（775）年
盛王琦	代宗	太傅	叔父	広徳二（764）年

※皇太子号・皇帝号を追贈された者は除く。

表5 唐代における皇太子号・皇帝号の追贈

追贈された人物	諡号	追贈者	追贈者との関係	追贈された年
建成	隱太子	太宗	兄	貞觀十六（642）年
弘	孝敬皇帝	高宗	子	上元二（675）年
重潤	懿德太子	中宗	子	神龍元（705）年
賢	章懷太子	睿宗	兄	景龍四（710）年
重俊	節愍太子	睿宗	甥	景龍四（710）年
重茂	殤皇帝	玄宗	従弟	開元二（714）年
撝	恵莊太子	玄宗	兄	開元十二（724）年
範	恵文太子	玄宗	弟	開元十四（726）年
業	恵宣太子	玄宗	弟	開元二二（734）年
憲	讓皇帝	玄宗	兄	開元二九（741）年
琮	靖德太子	玄宗	子	天寶十一（752）載
琬	靖恭太子	玄宗	子	天寶十四（755）載？
侶	恭懿太子	肅宗	子	上元元（760）年
琮	奉天皇帝	肅宗	兄	宝応元（762）年
瑛	皇太子	代宗	叔父	宝応元（762）年
俔	承天皇帝	代宗	弟	大暦三（768）年
邈	昭靖太子	代宗	子	大暦九（774）年
諲	文敬太子	德宗	養子	貞元十五（799）年
寧	恵昭太子	憲宗	子	元和六（811）年
普	悼懷太子	文宗	甥	大和二（828）年
湊	懷懿太子	文宗	弟	開成三（838）年
永	莊恪太子	文宗	子	開成三（838）年
漢	靖懷太子	宣宗	子	大中六（852）年
倚	恭哀太子	昭宗	弟	天復初

であった玄宗が崩御したのと、皇帝であった肅宗の崩御が同年であったことによるだろう。玄宗による追贈は見られるが、これは夏悼王と懷哀王が玄宗の讓位前に早逝したためである。玄宗の時代に薨去した棣王・鄂王・光王は全て玄宗の怒りを買ひ、殺されたり、後継者争いに巻き込まれて官爵を奪われた皇子である。先帝により、官爵を奪われたり殺されたりした皇子は、現皇帝から官爵をもとに戻されたり、生前よりも位の高い官爵をもらうのが普通である。肅宗は玄宗が存命中に即位したため、玄宗に配慮して追贈を行わなかったと考えられる。

また、玄宗の子に対する追贈は、都督や刺史、三公の追贈ではなくなり、太傅が中心に追贈されている。とはいっても、太傅も司徒・司空・太尉などの三公と同じ正第一品であった。

代宗以後、皇子への追贈は激減する。これは諸皇子の列伝の記載が少なくなり、薨去した年すらわからない皇子も多く存在しており、追贈の有無が不明であることも要因の一つである。

肅宗の子以後において、皇太子号・皇帝号以外を追贈されたことがわかるのは六人で、しかもその全てが、早逝したことによって追贈されている。¹⁴ 肅宗から早逝の哀れみによって追贈される例が増えてくるのは、皇太子号の追贈に

も通ずるものである。

(2) 皇太子位の官爵化

これまで見てきたように、皇族は生まれると王爵が与えられる。王爵は正第一品で、それに伴い追贈される官位も司徒・司空・太尉などの正第一品であることがわかった。特に爵位が与えられる前に早逝した皇子については、王爵が与えられ、郡王などの爵位のまま薨去した場合は、それよりも位の高い国王の爵位を与えられている。

皇族内で追贈されている者を見ると、皇帝の叔父に当たる者や夭折した者が多いが、彼らは特に功績を立てたわけでも皇帝から寵愛されていたわけでもなかった。彼らはただ皇帝の叔父であったため、もしくは夭折したために王爵や三公の位が与えられているのである。一方で皇太子号・皇帝号を与えられた者は皇帝の寵愛を受けたり、功績を立てている。彼らは一般的な皇族たちと区別するためにも、三公や王爵よりも高い位が求められたと考えられる。だが三公や王爵は、すでに唐代の官爵内において最も高い官爵である。一般的な皇族たちと区別するためには正第一品よりもさらに高い位が必要となったのである。そこで皇太子号の称号を与えることが求められるようになったのであろう。そして皇帝号は、承天皇帝倓の例からもわかるよ

うに、皇太子号よりもさらに高い位として、差を設けたに過ぎないのである。

つまり皇太子号は、正第一品の王爵や、司空・司徒などの正第一品の官位では不足であるとされた皇子が追贈されているといえ、皇帝号は皇太子号でも不足であるとされた皇子に追贈されているのである。これは皇太子号・皇帝号が、正第一品の官爵↓皇太子号↓皇帝号という序列にあったことを表しているだろう。

ところが最初に述べたように、皇太子は篡奪や家臣の反乱を防ぐために立てられるもので、本来皇太子位は官位でも爵位でもないはずである。官位でも爵位でもない皇太子位が、三公などの正第一品よりも高い位として扱われることは、唐代において皇太子位が官爵として意識されていたことを示唆するものではないだろうか。唐代の皇太子号の追贈を考察すると、次第に皇太子位が官爵化していく様子がみてとれるのである。

おわりに

本論では、唐代において皇太子号・皇帝号が頻繁に追贈された原因について、『唐大詔令集』を中心として、順を追って考察を加え、皇太子号・皇帝号を追贈された者と追贈さ

れなかった者とを比較し、それによって当時の皇太子観について検討を試みた。その結果、高宗による皇帝号追贈に始まり、玄宗の「友于」による兄弟への追贈が盛んに行われるようになり、粛宋の哀榮、代宗の功績による追贈と、次第に皇太子号・皇帝号の追贈が容易に行われていく様子が見て取れた。そして皇太子号を追贈されなかった皇子と比較すると、皇太子号が正第一品の爵位・官位の一段階高い位に位置していることが明らかとなった。

皇太子号だけでなく、実際の立太子においても、讓皇帝憲が功績によって玄宗に皇太子の位を讓つたことは、皇太子位の変化を明確に表しているものといえる。「国難」である時と限定されているとはいえ、隋以前には、功績によって立太子が決まることはなかった。

皇太子位が功績によって与えられるようになり、正第一品の官爵↓皇太子という明確な序列が示されたことは、皇太子が官爵的なものとして認識されていたことを示すものであるといえる。皇太子位は次第に唐の整備された官爵制度の中に組み込まれていったと考えられる。そして皇太子位の変化は必然的に皇帝位にも影響を与え、それが五代十国、ひいては宋代に引き継がれて行くのである。

唐代では他の王朝に比べて皇太子を廃立させることが多く、また後半期になると、ほとんどが即位直前に立太子さ

れるなど、皇太子位は一見相對化・形骸化しているようにもみえる。しかしこれはただ相對化していたのではなく、官爵のように認識されていたために起こったものと考えられるのである。

追贈の原因は、皇太子位の官爵化だけでなく、他にも儀礼や政治的な要因も大きかったと思われる。それについては、次稿で考察したい。

註

(1) 例えば、南斉の文惠太子(『南齊書』卷二、文惠太子伝)、梁の昭明太子(『梁書』卷八、昭明太子伝)は即位することなく病没しており、それぞれ皇太子として立伝されている。また、同じく梁の哀太子(『梁書』卷八、哀太子伝)と愍懷太子(『梁書』卷八、愍懷太子伝)は皇太子のまま殺されたため、皇太子として立伝されている。

(2) 前漢には戾太子が冤罪によって死去しているが、彼は死後に皇太子号を追贈されたかどうかは不明確であるため、ここでは触れない(『漢書』卷六三、戾太子伝参照)。

(3) 唐では、他にも懿德太子重潤・節愍太子重俊が名誉回復により皇太子号を追贈されている。隋以前でこのような例は、西晋の愍懷太子のみである。

(4) 趙翼『廿二史劄記』卷十九、唐追贈太子之濫。若玄宗贈弟申王撝為惠莊太子、岐王範為惠文太子、薛王業為惠宣太子、此三王者、將以為睿宗之太子耶。(中略)此三王初未

身為太子、則加以大國榮封可矣。(中略)此則苟欲以追崇見其友愛、而不知軋失礼甚矣。

(5) 喬鳳岐「唐代太子諡述論」(『鄭州大學學報』(哲學社會科學版)五〇一五、二〇一七年)。

(6) 『旧唐書』卷二五、礼儀志。景雲元年冬、將葬中宗孝和皇帝於定陵、中書令姚元之・吏部尚書宋璟奏言、「準礼、大行皇帝山陵事終、即合祔廟。其太廟第七室、先祔皇兄義宗孝敬皇帝・哀皇后裴氏神主。伏以義宗未登大位、崩後追尊、神龍之初、乃特令遷祔。春秋之義、國君即位未踰年者、不合列敘昭穆。又古者祖宗各別立廟、孝敬皇帝恭陵既在洛州、望於東都別立義宗之廟、遷祔孝敬皇帝・哀皇后神主、命有司以時享祭、則不違先旨、又協古訓、人神允穆、進退得宜。在此神主、望入夾室安置。伏願陛下以礼斷恩。」制從之。及既葬、祔中宗孝和皇帝・和思皇后趙氏神主於太廟。其義宗即於東都從善里建廟享祀。時又追尊昭成・肅明二皇后、於親仁里別置儀坤廟、四時享祭。

(7) 一番末の弟である隋王隆禧は、王に拝される前に夭折しており、睿宗即位後に王を追贈され、皇太子号が追贈されることもなかった。(『旧唐書』卷九五、隋王隆禧伝参照)。

(8) 例えば、『後漢書』列伝第五四、史弼伝には、「陛下降於友于、不忍遏絶。『李賢注』友、親也。尚書曰、「惟孝、友于兄弟。』」とあり、ここでは、すでに兄弟の文字はなく、友于だけで用いられている。

(9) 『旧唐書』卷九五、惠文太子範伝。範好学工書、雅愛文章之士、士無貴賤、皆尽礼接待、与閭朝隱・劉庭琦・張諤・

鄭絛篇題唱和、又多聚書画古跡、為時所称。時上禁約王公、不令与外人交結。駙馬都尉裴虛己坐与範遊讌、兼私挾識緯之書、配徙嶺外。万年尉劉庭琦・太祝張諤皆坐与範飲酒賦詩、黜庭琦為雅州司戸、諤為山莊丞。

(10) 『資治通鑑』では、宝応元年建寅月に李琮への皇帝号追贈の記載が見られ、このことから肅宗元年が宝応元年であることがわかる。（『資治通鑑』巻二二二、肅宗宝応元年建寅月の条参照）。

(11) 『旧唐書』巻一一六、承天皇帝倓伝。深思建寧之冤、追贈齊王。

(12) 『旧唐書』巻一一六、衛王倓伝には、「衛王倓、肅宗第四子。天宝中、封西平郡王、授殿中監同正員。早薨。宝応元年五月、追贈衛王。」とある。

(13) 吳麗娛『終極之典』中華書局、二〇一二年、第十章「贈官的起源与唐代官員的自身贈官」。

(14) 肅宗の子で皇太子号・皇帝号以外を追贈されたのは、衛王倓と鄆王瑒で、早逝によって王を代宗から追贈されている（『旧唐書』巻一一六参照）。代宗の子は、均王暹と荊王選で、早逝によって徳宗から追贈されている（『旧唐書』巻一一六参照）。また、徳宗の子は肅王諱と代王諱が早逝によって徳宗自身から追贈されている（『旧唐書』巻一五〇参照）。

(15) 『旧唐書』巻九五、讓皇帝憲伝には、「時平則先嫡長、国難則帰有功。」とあり、玄宗の兄の李憲が長子で皇太子となるべきであったが、玄宗は韋氏を平らげた功績があり、

国難という条件付きではあるが、その功績により皇太子にふさわしいとされた。

【付記】 本稿は、第一七回魏晋南北朝史研究会大会（二〇一七年九月二三日）で行った「皇太子号・皇帝号の追贈——唐代を中心として——」の口頭発表をもとに加筆修正したものである。